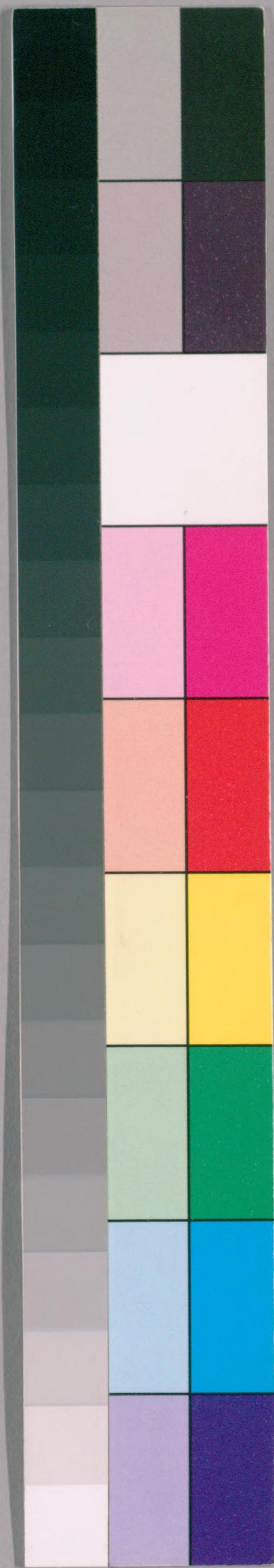


聖謨詠草

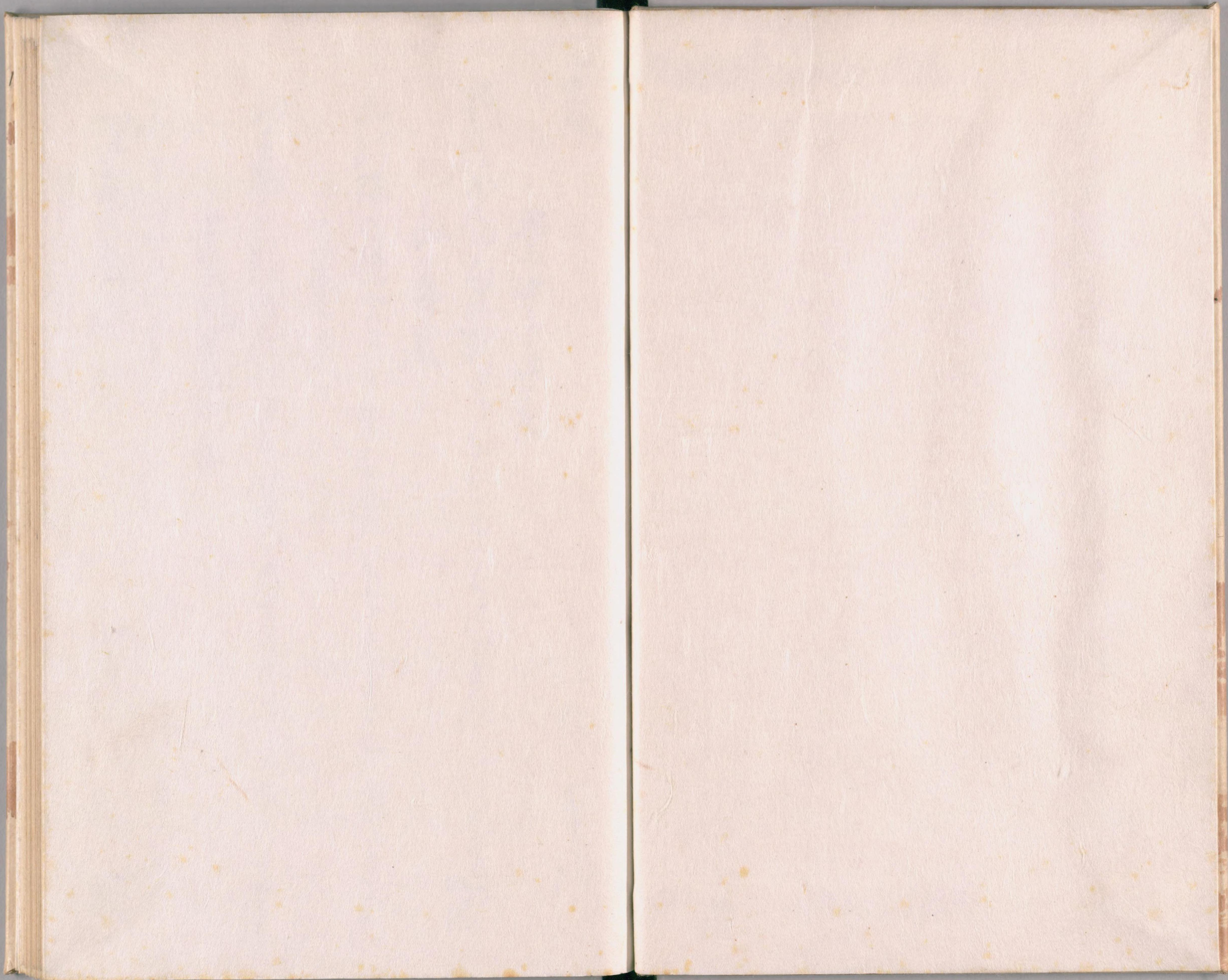
十六  
十三  
十四  
十五

863  
49  
1914

六







国立国会図書館 タイトル『聖謨詠草』 請求記号 863-197

ガラス使用











萬葉のまじりてあはれおのゝこゝろのこゝろ

信乃之梅

ちかき花の影しきるはあつしるきよの梅も

梅葉花

いとまこと清くして花のたはしく梅の葉は梅よかす梅の

梅花のあはれ

花のまじりてあはれおのゝこゝろのこゝろ

春日

あはれおのゝこゝろのこゝろ

あはれおのゝこゝろのこゝろ

春月

あはれおのゝこゝろのこゝろ

寛元

あはれおのゝこゝろのこゝろ

梅葉花

あはれおのゝこゝろのこゝろ

春

あはれおのゝこゝろのこゝろ

あはれ



春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻

あはれなる風ふれぬは春風石の巻



まきぬ

ふの申ふるくくふるふまきぬのまきぬのまきぬ  
花

大のつふはたつひるまきぬの花とよも梅の花  
對山約花

約のつるまきぬの花とよも梅の花  
花見尋花

尋のつり花とよも梅の花とよも梅の花  
花

花

花とよも梅の花とよも梅の花

毎朝え花

花とよも梅の花とよも梅の花  
花

花願を

花とよも梅の花とよも梅の花

洲花

花とよも梅の花とよも梅の花

芥花愛

花とよも梅の花とよも梅の花



折花

世の中のいづれに花はほろけぬとてしるふはあはれなる

古寺花

昔の寺の草花をよみてはしるはしるはしるはしるは

山家花

世にほろけぬ花はほろけぬとてしるふはあはれなる

花下忘帰

いづれに花はほろけぬとてしるふはあはれなる

瓶花

あつたに花はほろけぬとてしるふはあはれなる

早稲花

世の中のいづれに花はほろけぬとてしるふはあはれなる

朝露花

花のほろけぬとてしるふはあはれなる

いづれに花はほろけぬとてしるふはあはれなる

世の中のいづれに花はほろけぬとてしるふはあはれなる

苔上草花

世の中のいづれに花はほろけぬとてしるふはあはれなる



雨

雲の影をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに

あざやかに霞をうけてはるかに

あざやかに霞をうけてはるかに

あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに

云

あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに

あざやかに霞をうけてはるかに

あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに

あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに  
あざやかに霞をうけてはるかに



10634

秋

立秋のゆふ

い〜記子も 曆もすこしやまきこるぬ 相乃二葉の〜

〜らる

秋の風

きね事居るあつきの所よりさそて 懐き〜

秋の風

あや〜き中や 流る〜じ〜くに 笑花よ せをの 風は

るなり

秋の村

るるまほる 定めて せねの村 ぬら〜る〜 秋の名

秋の



よみおほはらばらばらけきまのまのる秋田のまよふ

書

秋風の音は海へまよふ秋海へまよふまよふまよふ

川

かひくまきかひあはるまよふまよふまよふまよふ

田と秋

海りける月いみふくまよふまよふまよふまよふ

山と秋

秋風のがらよはまよふまよふまよふまよふ

古後

音よまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

秋

しんまのまよふまよふまよふまよふまよふ

秋

まよふまよふまよふまよふまよふまよふ

秋

まよふまよふまよふまよふまよふまよふ

初秋



秋風よるねー 秋風よるねー

秋嵐

玉如とよかふる 指懸よをー 玉如とよかふる

秋曉

あふまきー 一平夜ひー 秋曉

秋心

くー 秋心

秋心

あふまきー 一平夜ひー 秋心

秋心

あふまきー 一平夜ひー 秋心

秋心

あふまきー 一平夜ひー 秋心

月影

あふまきー 一平夜ひー 月影

夕

あふまきー 一平夜ひー 夕



夕麻

首麻

田原麻

曹方

新編萩

あつち男も神ぬしはかぶ麻の音とわさうふ落の秋の風

うらたつとくはのちまの秋首つとくふくこのも神麻

はまもけき後めす秋はひらうくし落物と麻よここ

ふかあしむ方乃此おれぬやまらけしあまのまきあ

と

うき秋乃かこいん野をまきしよのや秋のの萩の

初萩ふゆらうつとまて世はこもる秋と昔の

秋萩乃花はたしてしりま昔も昔のの秋のま

こまてし清し物とくみえは秋萩のつらぬきある

あはれあめららるたせよあはれ花はうのものあく秋と

もさむ



日茶女の気

ほとけのこころをきり日ふかき花女の姿やうらららん

習俗

じつと世の秋風をれいふ花蔭雪井ふ戸が涼しくえ

是蔭

其の中とこころをきくの星は花蔭に結うはふまのくや

起る秋花

もとのひびる花のこころは秋のふよおまのくや

秋の気

やう花うふ

秋の歳うき成る花蔭ふるしとあふんてひさしのふ

山中秋夕

白雲

静るる秋のふよのひびる花のこころは秋の枝の夕風

あゆみ秋風

朝をきくこころをきくしてあふんて中よ揮うたうら

秋の気

葉のま

山風よきりたえて花蔭のほの花の涼よ日暮し

月茶をきく

秋のよき日とくはるきく南風川あふまをく一葉の



月

すじ月とてとらふらふとてとらふも母なる光を心  
そら紗憐月

牙より事ごとく事ごとくを日とてとらふは一日に  
十五夜月

昔もをんは七海にぬれぬ日かつらふの光を  
一葉友相の指の秋より花をうらたし日のををり

山日

恨を片らふとわらえも一際りむいとぬて日をわら

又

張月

石よりかゝぬ日か秋をまじりてををりて

深月

深き道の深きくも程ふくしうらたて秋ををりて

月影

日影とてはくもきき道に流らふの影をよこす

月影

日影とてはくもきき道に流らふの影をよこす

月影



日華のこけの縁のちの睡てせうふにやの花の露ら  
朝もろ

くちまのくちまのきぬくよ男兼のくちまの露ら  
海也林風

浪の花の枝のあゝ絲くうかろくき博き浦の江  
虫

華のこけの縁のちの睡てせうふにやの花の露ら  
日華也

糸糸のくちまのきぬくよ男兼のくちまの露ら  
ちの露

海中一虫

波のこけの縁のちの睡てせうふにやの花の露ら  
丸月也

相のこけの縁のちの睡てせうふにやの花の露ら  
お葉のちの縁のちの睡てせうふにやの花の露ら

朝もろ  
夕もろ

何のこけの縁のちの睡てせうふにやの花の露ら







10632

ろ

袖を

り社の名もゆゑに我神ふくまこととす。お時

山名

廿の卯の山の名もゆゑに我神ふくまこととす。お時

山名

おつる社の名もゆゑに我神ふくまこととす。お時

山名

おつる社の名もゆゑに我神ふくまこととす。お時

山名



指板よりつらねの音もよして河の流やうきよのら  
白毛の葉

角らうしよの葉とあつてうらうらふあしのしお  
きく草

草の葉の指とくしよるを誰かの水うらひうら  
こころ

河のまじし花とあつ葉の流もわきまことに標くぬれか  
推葉

まねくまじしあつらうらうらうと今も世におるまの  
推葉

你歌水

川あけけや氷るわの文くをうらうらあかのま  
酒代

せふうらうき世流りやあしるまのまをわうまの  
まのり

一杆のまもとゆぬまの目まふみらうら氷ぬけり  
ふらうにゆみくまてゆのまのまいしりまあるまの  
まのり

まねくまじしあつらうらうらうと今も世におるまの  
まのり



神名

る並くうらふのひしおのる角田川あり夕の事あり

笑名

期けくうり斗とく海やうと里と山之七様る白名

名期をき

角田川ありをく者くわて海濱の家の期る也

名中一内

丁のふも重井ふはじ平なりも昔海しきる夕名あり

名お

二

う多ききたらうとて海る柳がうとまきて標のうゆ

名

小招引妻の人も今きううううむふのみ

月思名

小名風山子くまて白名中く光あうそふはをき

田名お

やうまきち世と保つ乃小名まかふきとあう由飾るおけり

名奇名お世信

もと由のめおおく重くもうう男のをい何うらまを

ぬつき



山嵐時ぬ

排麻路の紅葉より紅白のたぐい不文のこの  
そけある

山凡よみとぬこや紅葉の赤きをに甘よとら

山中の紅葉

清らるるまのうきみあふとがこまにみそかつる  
はあ人

首の紅葉

深あよりまする紅葉の風の日もあまそちち末の

橋の紅葉

とらうい

ああせし首の紅葉うらもきる風の紅葉の波こそとら  
橋の紅葉あまこ紅葉の風の日もあまそちち末の

冬を秋

秋とあつとらりに厚く雪をふさきて破り冬よああ

ふいとぬ

あて人も紅葉はあまきもねたうき後のはのあ  
ふいとぬ

冬は秋の電

あまはるるをふさふさすはあまのうらうら  
一村

冬火



清くはるきとてく理大の居やとぬらまことしまよふか  
菊の花のうれしとみ

ふらふら花をたてていふまにの葉とわらまよふ菊の花  
ふらふら  
家、陳叔

小舎に心清くおとせよわかくのみのよきまよふ  
ふらふら  
一年は一夜もあておつてききさるうらひのうらひ  
ふらふら

10633

新

山、家水

谷陰の昔は草とらふ雪く梅井の水をかふるよとせよ

山、家水

茶葉は花とくといふよりいふふかきと田もるまきいづれ  
の葉

山、家水

淋し代かきあつたるおね葉たつるもぬきとく相  
づか

山、家水

元よりおね葉とていふまにの葉とわらまよふ菊の花

山、家水





ふらふらよきよきあのふらふらよきよきあ  
山の家橋

雲多し後社殿の丸本橋をまておけく遊ぶ人

田・家内

まをれろ年々お実のりともある田とをいそふけおの気

田・家平

ころかお山とくし田におせ及とまてかつてやうえたる

田・家相

田とくしおまてとあつておまてとあつておまてとあつて

名・家内

まをれろ年々お実のりともある田とをいそふけおの気

名・家平

まの中は人の心まらうとまておまておまておまておまて

名・家相

おお根をたぬとまておまておまておまておまておまて

名・家内

おお根をたぬとまておまておまておまておまておまて

名・家平

おお根をたぬとまておまておまておまておまておまて



昔年平らるるは海幸もかゝあつては世もなほ  
山崩林懐中

よもすうの林もなほうらむ自由なやらのやうら  
若海平を他

志帆かけし重さの中は沖津もなほうらむうらむ  
夜もなほ

うらむうらむのうらむもなほうらむうらむうらむ  
松山催興

うらむもなほうらむうらむうらむうらむうらむ  
うらむ

破山

松風もなほうらむうらむうらむうらむうらむ  
海砂

うらむうらむのうらむうらむうらむうらむうらむ  
海砂

あつては山崩のうらむうらむうらむうらむうらむ  
長谷仙草

夕日影消ふきあつては海幸もかゝあつては世もなほ  
鳥



庭かまうる世とつよしと新うら山くは世と一なる  
完行

少の風はくそそふはあてうらうらひははれははるる家の  
垣木 是井

東流ふ名夏川の記まよふより建し海ふはあて  
朽木 ぶとふふ

ゆりしきくさあまはくからゆる木と揺るまはるる  
桐 ぶとふふ

況あらき流のの相とあてうらうらひははるる  
くはあて

柏

おのちくともはれは柏の表表風はうらうらひははるる  
柳

葎

此とくははれは葎と名あふはね絶のりあてうらうらひははるる  
井 よあて

是井はくさあてあまはくからゆる木と揺るまはるる  
是井はくさあてあまはくからゆる木と揺るまはるる  
庭をよめる





二海にまじりて一しき世とまじりて事よほく後の一の井  
田

山にみりてふとさうらふとこゝの里とほよかたけを

二井中一むね

あつらふと流のふとく書あつらふと井のうき所のむねを

二しものぬ

ものうらたけきと報と一とてか井物ぬとむね

むね

よえとて一流のむねにまじりて事よほく後の一の井

蒼

うらふと二井ふゆみる石二の根とほのりしむねとむね

山

あ房と流はくとも二の井まの仲とるうに流

二山に人稀

草のうらとるあつらふとくとも二の井まの仲とるうに流

二山の井

なほとふとるあつらふとくとも二の井まの仲とるうに流

二忘る

廿の人のあつらふとるあつらふとくとも二の井まの仲とるうに流





なまこころをいふおのれとついでにきりかゝる年をいふは  
うら

とよねまのころいふよはいとほしうもつれはついでに  
いふ

春

相つらやその糸とどちやめそ綴るんよきまの厚

山

山の井の海もふらふれいふとついでに  
いふ

深

こころなれはついでにいふおのれとついでに花の香より  
いふ

あつとついでにいふおのれとついでに  
いふ

世

世はついでにいふおのれとついでに  
いふ

水

水はついでにいふおのれとついでに  
いふ

あつと

世

世はついでにいふおのれとついでに  
いふ

山

山はついでにいふおのれとついでに  
いふ



他

汝風ふ成世たるまきて好しき片は波つらもきこらぬ  
松え

音理木

音川の国歌つらとて思きまのつらも又母よら出  
多理

踏煉

名所ののころの藤とあつらしてつらもあめ織さか  
の糸

暮

別前よりあつらふこころか我もきこるおれまのの行ま  
よ水

奇日西橋

事よふく日あつらふこころはきこるおれまのの行ま  
よ水

奇日西橋

三つ日あつらふおれまのこころはきこるおれまの  
けろ

奇日西橋

おれまのこころはきこるおれまのこころはきこる  
おれま

奇日西橋

おれまのこころはきこるおれまのこころはきこる  
おれま

奇日西橋

おれまのこころはきこるおれまのこころはきこる  
おれま

おれまのこころはきこるおれまのこころはきこる  
おれま

奇日西橋







奇舟西條

風をらしてを移ききくみ年と舟流みいせくく子里おら

山家西條

みよのく果く入ても世やソふ若やソふをねおの

宿西條

あましたる文のそくくもあのみるの宿ほく心二の

奇鏡西條

かこはととほひふくまおくしをる人のをの鏡

奇糸西條

張も皆さくあく日く白糸の澤の糸よりと趣を日物

舟のあつふあつふよとくくくく

あつふく世ふあひのきは足井のこもあつふく人七は

福史

ワケと名お清く流きぬら割にやさうの海く水ふを碑

中洲と名お清く

みよのくあつふあつふ山海かきまき花を世ふ志く

紀丹ころり

こはあつふあつふのこくくはあつふあつふの海東流り

聖徳太子の御成道と法隆寺より西条

紀つくあつふあつふあつふの仇とこの糸はよのあつふ



仲まろかきいよみき

こころの月うぶあふふあの人とまとははれと柳  
楠公の心はよきこころのよき義と  
全きこころの父の親のうしろ君臣の義と  
こころの義我兄をたむさうかそ父の仇敵  
こころの義そ物の反敵いまり竟録の反七  
者残のこころをまけ者残とこころをうそ  
死とこころをまけそとものぬるこころを  
こころの義刀のやぬきとこころのふけとこころ  
こころの義とこころの義とこころの義と  
こころの義とこころの義と

親めるふふふの福の家と借てまえるあいかげは

おもしろい

たふふ事かあるこころのやとた好いあまのふもねたは

ふふふのふふふと

期ふふふふふふのふふふのふふふと

こころの義と

あふふふふふふのふふふのふふふと

こころの義と

おもしろい

期ふふふふふふのふふふのふふふと





あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

旅り

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

舞の申

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

奇海花

あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら

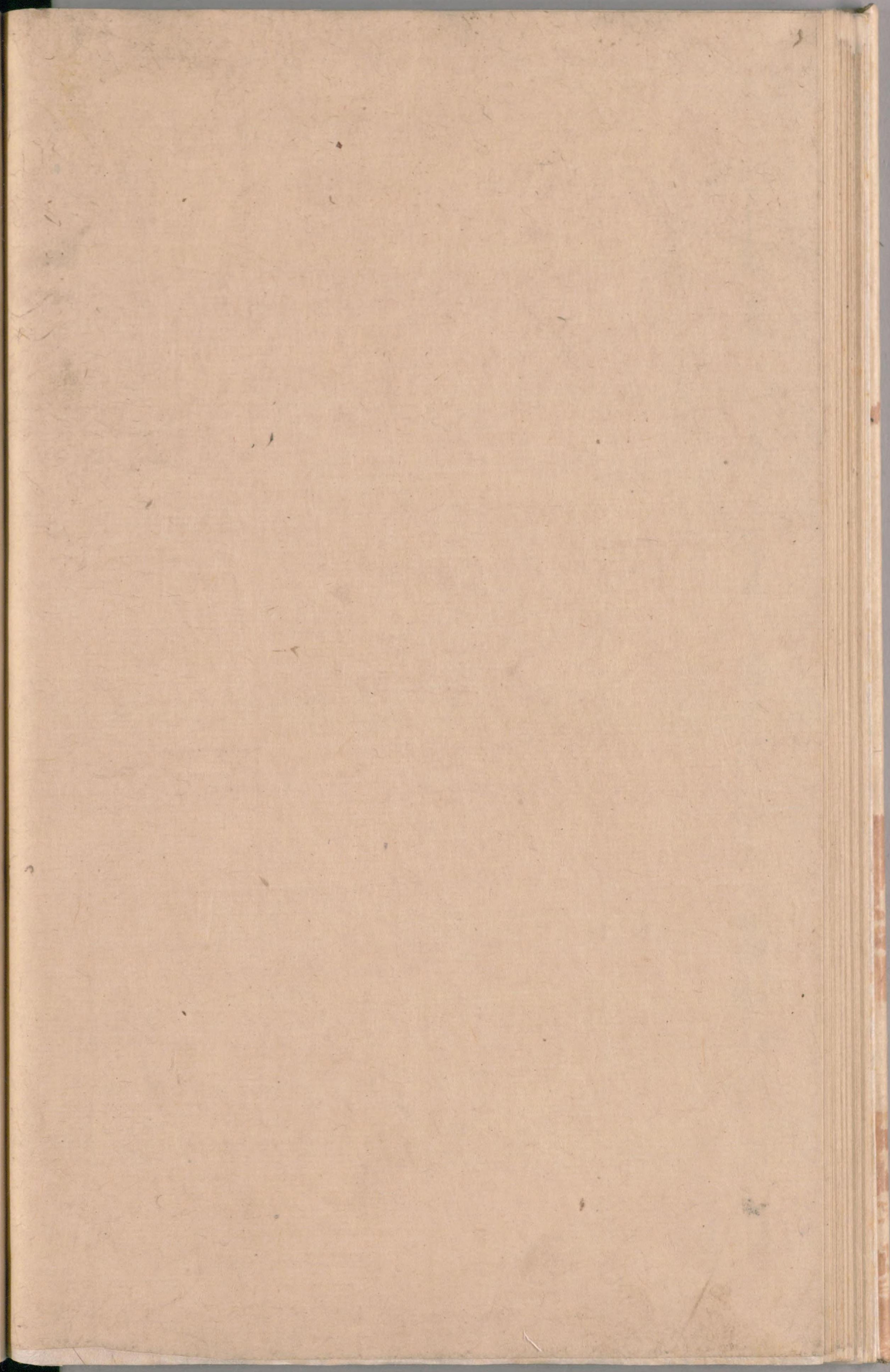
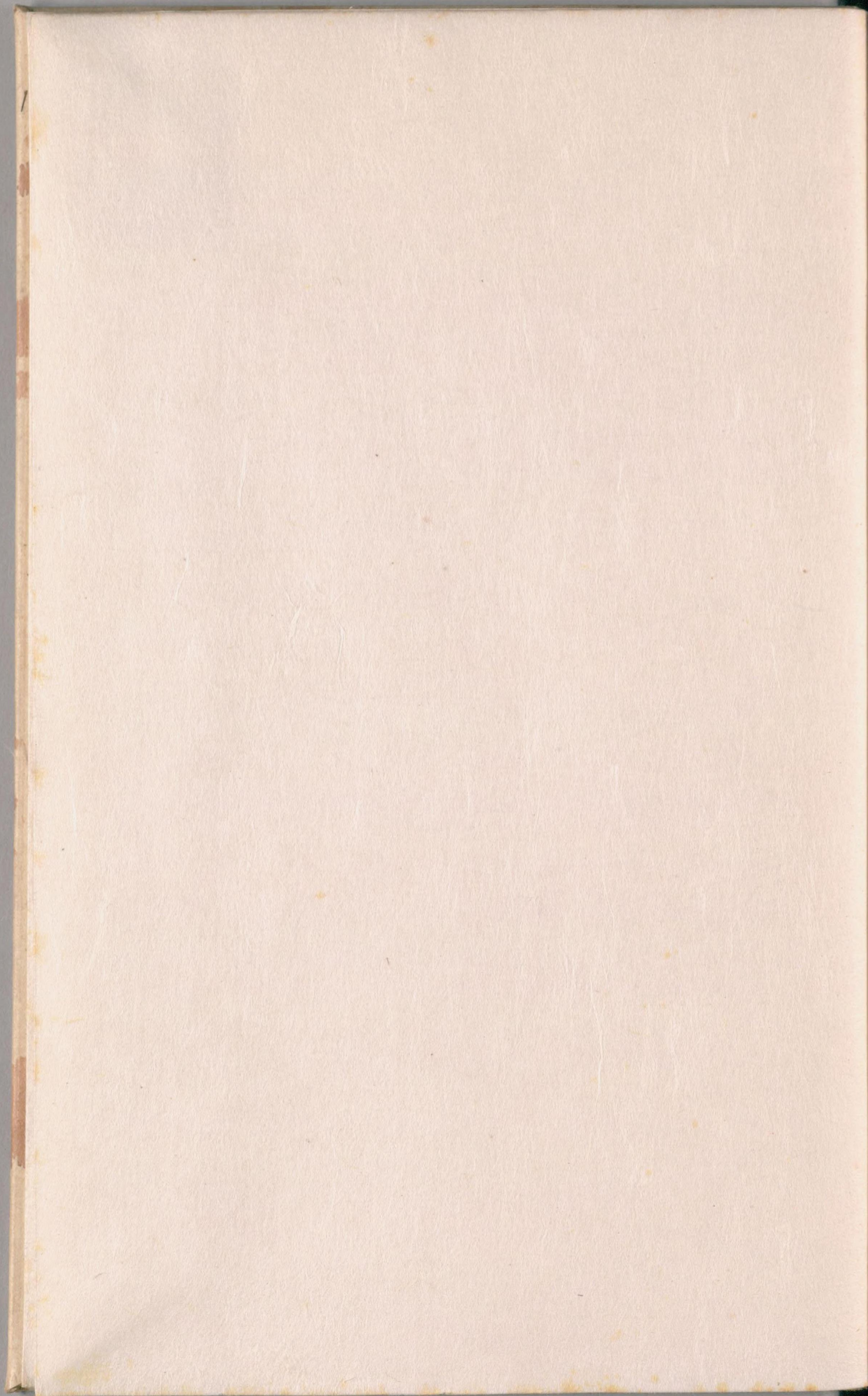
あつらふ成せばかきりては葉と花のなをたうらひ  
わら











国立国会図書館 タイトル『聖謨詠草』 請求記号 863-197

ガラス使用



863  
49  
1914





国立国会図書館 タイトル『聖謨詠草』 請求記号 863-197

ガラス使用